日本台湾学会
ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 46 号

<目次>

巻頭言 ･･･1
特集　はじめて台湾／日本へ行ったとき ･･･3
総統選挙観察 ･･･15
学会活動報告 ･･･21

巻　頭　言

はじめての台湾と「熱い」選挙

日本台湾学会理事長　北波道子

2024 年は、「選挙イヤー」と呼ばれているそうですね。

1 月 13 日の台湾総統選だけでなく、２月にインドネシア、３月にロシア、６月にメキシコ、11 月に米国で大統領選挙が実施されます。また、欧州議会選挙や、韓国、インドでは総選挙も控えているということです。コロナ禍明け、ロシアのウクライナ侵攻や激化するパレスチナの紛争など、不安定化する国際状況の中で、各国のリーダー選びは、いつにもまして大きなメディアイベントとなっているようです。台湾の総統選挙に関するニュースも、日本やインターネットの国際ニュースメディアで数多く見られました。総統選挙が注目を集めるということは、台湾の人々がどういう意思を表明しようとしているのか、世界の人々が知りたいと思っているからに他なりません。選挙は国際的なイベントでもあるのです。

しかし、台湾の選挙の醍醐味は、それだけではありません。『日本台湾学会ニュースレター』では、これまでも台湾の選挙について、特集や寄稿の形で観察記を掲載してきました。下に、一覧を列記しますと、執筆者は政治や選挙の専門家が含まれますが、広くいろいろな分野から寄稿されていることが分かります。

選挙関連の寄稿一覧　※（）執筆者、敬称略。
創刊号（1998 年 12 月発行）「高雄近訊～選挙へ向けて」（大坪力基）
第２号（1999 年４月発行）　特集　「三合一選挙」をめぐって
（石田浩　小笠原欣幸　塚本元　松本充豊　川島真）
第８号（2004 年４月発行）　特集　台湾の人々と大統領選挙
（石田浩　石原忠浩　川村裕之・冨田哲　上水流久彦　石丸雅邦）
第 14 号（2008 年４月発行）　特集　大統領選挙見聞記
（松本充豊　松田康博　上水流久彦）
第 20 号（2011 年３月発行）　特集「五都選挙」をめぐって
（鈴木賢　野嶋剛　陳文松　山﨑直也）
第 22 号（2012 年８月発行）　特集　総統選挙を振り返って
（黄英哲　佐藤幸人　林果顕　藤野陽平　蔡増家）
第 27 号（2014 年 12 月発行）　2014 年台湾地方選挙　（小笠原欣幸）
第 28 号（2015 年４月発行）　特集　2014 年台湾統一地方選挙観察
（家永真幸　楊子震　福田円）
第 38 号（2020 年４月発行）巻頭言「台湾と言えば選挙　選挙と言えば台湾」（松田康博）

これらの力の入った観察記を読んでいると、選挙が、台湾の社会や暮らし、人々の感情すら読み解き、社会を動かすダイナミクスを考える上で重要な分析対象であることを改めて実感します。加えて、台湾の選挙の「熱さ」が会員諸氏を魅了してきた歴史を思い起こし、選挙の度に台湾へ足を運ばれた皆さんのエネルギーにも感動を覚えました。

さて、上のように並べてみると 2016 年の総統選挙以降、選挙特集は組まれてこなかったことが分かりました。というわけで、今号の特集として「総統選観察」と、もう一つ「はじめて台湾／日本へ行ったとき」をお届けすることとなりました。

編集担当の八木会員からこれらのテーマをもらって、私の頭に浮かんだのは、そういえば「ほぼ」初めて台湾に行ったときに実施されていたあの一連の選挙は何だったのだろうかという疑問でした。私が台湾の選挙のイメージを自身の中に形成したのは、1993 年４月から 95 年の４月まで、YMCA の日本語 OSCY プログラムで中部の彰化県に住んでいた時です。何度か遭遇したのは、幾台も列をなしてのろのろと道をふさぎ、スピーカーが割れるような大音量でそれぞれ「バイトウ！バイトウ！」と「タゲホゥ！」（大家好）とがなり立てていた選挙カー。日本語を教えるクラスの学生さんから聞いた「買票」事情。そして、選挙に勝つための多数派母語「台語（福佬語）」の復権(？)。あれは、1996 年の第１回民選総統選挙よりも前のことでした。

試みに検索してみると、それらしい選挙は、まず、1993 年 11 月 27 日実施された第 12 回県市長選挙です。しかしもっと何度も選挙があったような気がします。更に見ると 1994 年に、省長・直轄市長選挙（台北市・高雄市）、省・市議会議員選挙、郷鎮市長選挙、村里長選挙、県市議会議員選挙、郷鎮市区民代表選挙が実施されていました。省と直轄市の選挙については 12 月３日が投票日ですが、それ以外の選挙の日付はパッと見ただけでは見つけられませんでした。30 年！も前の地方の話です。またの機会に、確認しようと思います。

いずれにしても、ちょうど 30 年前の 1994 年は、台湾の「選挙イヤー」だったのだと改めて感慨深い気持ちになりました。　（2024 年 2 月末日）

特　集
はじめて台湾／日本へ行ったとき

２枚の竹盆――はじめての台湾

池上貞子（元・跡見学園女子大学）

私がはじめて台湾に行ったのは 1967 年夏のことで、それについてはすでに『ニュースレター 32 号』の特集「記憶の中の台湾――思い出の場所・思い出の人」（2017.４発行）の中で書いた。２度目は 20 年あまりを経た 1980 年代末で、その時すでに、経済発展を遂げた街の景観や、戒厳令の解除による中台関係の変化がもたらした影響は大きく、最初の印象はかなり薄れた。さらにその後は研究交流や勤務先の大学の用事などで訪れる機会が増え、「はじめての台湾」の記憶は加齢とともにだいぶ怪しくなっている。

それでも初渡台の記念となるモノがある。薄い竹片を貼り合わせたお盆で、何枚かいっしょに買ったが、今は大小の２枚しか残っていない。大きい方は直径 30 センチ、表面に「麻姑献寿図」という文字と美女の図、小さい方は直径 15 センチ、「貴妃酔酒」の文字と絵柄がある。多少の難はあるが、半世紀余りを経てまだ現役で、わが家の台所で活躍している。露天の山積みされた中から選んだが、正式な用途については、深く考えることなく過ぎた。

今回、改めて盆の裏を見たら、英語の説明が印字されていた。*Features of this Bamboo Plate* として、いわく、「熱や水に強く、壊れない。実用でも装飾用でも色落ちしない（熱湯洗いも可）。数世紀の歴史を持つ芸術品」として、末尾には、*Made in Taiwan/ Republic of China* とある。念のため、台湾の友人に写真を送ったら、「自分ははじめて見た。現在使われているこれに相当するのではないか」と、真っ赤なプラスチックのお供え用の盆（拝拝盤。水果盤。供果盤）の写真を送ってくれた。竹の盆はおそらく輸出向けの製品だったのではないかと言う……私は最初からずっと台湾の庶民が日常的に使っているモノだと思っていたのだが。しかし、考えたら、友人は現在 50 歳で、彼女の生まれる前の話である。実際はどうだったのだろうか？　半世紀余りを経て、私に新しい課題ができた。

もう一つ、私にとって具象的な「はじめての台湾」は、旧台北駅の木製の改札口だ。台南・高雄方面への旅行で発車待ちをしていた時だったか、現地の子どもたちが封鎖用の鎖を揺らしたり、それに乗ったりして遊んでいた。故郷のローカル線の駅を思い出し、すこぶる牧歌的な感じがした。竹盆を買った市場も台北駅の木の改札口も、なぜか思い出す時の背景はいつも広々とした真夏の青空である。台北駅は２度目の時には現在の建物がほぼ完成していて、牧歌的とは言いがたくなっていた。

当時の私は中国語専攻の大学生だったので、はじめて中国語が話されている環境に立つと、自然に町中の雑踏や公園で憩う人たちの会話に耳をそばだてた。自分がどのくらい聞き分けられるかと、期待と好奇心でいっぱいだった。が、思いがけなかったのは、基本的な文脈はまったく取れないのに、会話の中に混じる日本語の単語の多さにより、話し手たちの関係性や話題が推測できてしまうことであった。当時の大学の授業でも多少は中国語（国語/北京語、福建語の位置づけ）や台湾の歴史について学んだはずだが、それらと実際とを結びつける見識が自分に欠けていたということだろう。

知人宅で見たテレビでは薬品など日本製品のコマーシャルが多く、町中には中国語歌詞の日本のメロディが流れていた（当時、「骨まで愛して」という歌が大流行）。今から考えると、こうした事象の裏側に、黄春明の「さよなら・再見」の世界が展開されていたわけだ。冒頭に述べた拙文では、沖縄で風貌から中学生に間違われた逸話を紹介したが、台湾理解において内容的にもその程度でしかなかったのである。そういえば当時は「台湾文学」という概念もまだなかった。私自身は張愛玲研究から無自覚的に台湾の文学にかかわり、そのまま現在に至ってしまっているのだが、今はまた別の意味で「台湾文学」研究の意味を考えなければならないのかもしれない、と思う昨今である。

平埔族との出会い

清水純（日本大学）

私がはじめて台湾で長期のフィールドワークに入ったのは 1984 年のことだった。前年に観光旅行で訪れてから何度か往復するうち、クヴァランを研究したいと思うようになった。クヴァランは漢化の進んだ平埔族の１グループとして分類されていたが、一部地域に言語・文化が残っていた。花蓮県の海岸沿いにある豊浜郷新社村をはじめて訪ねた日に運よく住む家も決まり、すぐに調査を始めることになった。

渡航にあたって言語学の橋本萬太郎先生から「平埔族の言語は貴重だから、人類学の調査だけでなく言語の調査もするといい」とアドバイスされた。「現地で聞いた会話はすべて録音しなさい」とまで言われたが、長期滞在中の会話をすべて録音するのはさすがに無理な話だった。新社の中心集落ではクヴァラン語が飛び交い、アミ人の婚入者たちもネイティブに負けないほど流暢に言葉を操っていた。慣れない耳には村人たちのおしゃべりが雀のさえずりのように聞こえた。

調査の合間に宜蘭にも出かけ、祖先の地に残っているクヴァラン人を探した。ことばのできる人がいると聞いて訪ねた五結郷季新村（旧流流社）では、89 歳のおばあさんが亡くなったばかりで、ほかには単語を少し覚えている 70 代の高齢者が何人かいるだけだった。彼らは自分の民族名を知らなかった。70 歳になる林阿菊さんは、「自分たちペイポ（平埔族）がことばを忘れたのは、人数が少なかったからだ」と語った。「苗栗の客家人は大勢いるから気兼ねせずに自分たちのことばを話しているけれど、私たちは気兼ねして次第に平埔のことばを話さなくなった。平埔語を話していると台湾人から“生蕃”と間違えられて馬鹿にされた。自分たちは“熟蕃”なのに“生蕃”だと思われる。それがいやなので台湾語を話すようになり、子供にもことばを教えなくなったのだ」という。林さんが単語を覚えていたのは親から教わったからではなく、使っているのを聞き覚えたからだった。

季新村のクヴァラン人たちは長老教会の信者だった。漢人に取り囲まれた環境のもとで、キリスト教を後ろ盾にかろうじてアイデンティティを守っているようにも見えた。このとき村人から、「台北に平埔族の牧師がいる。ことばもできる人だ」と教えられたので、早速連絡して会ってみることにした。新北投の長老教会に勤める 88 歳の潘水土牧師である。潘牧師は最初のうち私をかなり警戒していて、会うなり、「私が平埔族であることを誰に聞いたのか」「何の目的で言語の調査をするのか」「調査してどうするつもりなのか」と矢継ぎ早に問いかけてきた。そして「平埔族であることは家族には内緒にしているから、子供や孫たちには絶対に言わ

ないでほしい」と私に念押しして、やっと調査に応じてくれた。淡水の神学院で学び、牧師としての地位を得たほどの人であったが、平埔族ゆえに自身がおそらく受けてきたであろう漢人社会からの圧力を、子供や孫には味わわせたくなかったのにちがいない。

潘さんも宜蘭の人たちと同様、民族名を知らず、記憶していた単語は 15 個しかなかった。しかし、のちに土田滋先生の解析により、それが希少なケタガラン語であることが判明した。伊能嘉矩が初めて 83 個のケタガランの単語を採集したのは 1896 年、潘さんが生まれた翌年のことだ。日本統治が始まる前からケタガランは漢化が進んでいた。潘さんの両親は「平埔語を 10 分の３くらいは話せた」というが、潘さん自身はわずかな単語を記憶するのみだった。潘さんの子供たちはもちろんケタガラン語を知らない。平埔族とその言語が急速に消えていった背景の一つには、自分たちの言語やアイデンティティを子孫に伝承しないことを選択した親の世代の意思があったのだ。

民主化とともに平埔族各グループの間でも正名運動が高まりを見せた。人々の意識は大きく変わり、平埔族であることを隠さなくなった人たちが増えている。潘水土牧師の娘の潘慧耀さんもそのひとりだ。お父さんの亡くなった後に自分が平埔族であることを知り、自立北投基督長老教会の長老として、ケタガランであることを公にしている。2001 年、ツォウの一部に分類されていたサオが 10 番目の原住民族として認定され、固有の言語や儀礼を保ってきたクヴァランは 2002 年に第 11 番目の原住民族として政府に認定された。しかし現在 16 にまで増えた原住民族の中には、新たな平埔族グループの認定は含まれていない。言語の消失という事実が、越えがたい壁の一つとなっているのである。

シリーズ地域研究のすすめ

ようこそ中華世界へ
川島真 編　中国との関係は多くの分野で深化しているが、その「中国」とは台湾・香港・マカオ・華人を含めた多様な中華世界だろう。政治から文化に至る多方面の専門家が、中華世界を解説する。　２９７０円

中国の外交戦略と世界秩序
――理念・政策・現地の視線
川島真・遠藤貢・高原明生・松田康博 編　習近平率いる現代中国は自らの対外政策をいかに説明しているか。また現地社会からどう見られているか。双方向的に考察する。　３８５０円

東アジアで学ぶ文化人類学
上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大 編　中国、台湾、韓国そして日本など東アジアでフィールドワークを行う研究者達が現地で出会った事例をもとに文化人類学の主要テーマを解説する。　２４２０円

テロワール
――ウインと茶をめぐる歴史・空間・流通
赤松加寿江・中川理 編　４１８０円

タバコ産業の政治経済学――世界的展開と中国の現状
丸川知雄・李海訓・徐一睿・河野正 著　４２９０円

ビーズでたどるホモ・サピエンス史
――美の起源に迫る
池谷和信 編　３０８０円

外国人移住者と「地方的世界」
――東アジアにみる国際結婚の構造と機能
藤井勝・平井晶子 編　６３８０円

石干見の文化誌――遺産化する伝統漁法
田和正孝 著　５２８０円

〒607-8494　京都市山科区日ノ岡堤谷町 3-1
TEL 075-502-7500　FAX 075-502-7501
図書出版 昭和堂
〈価格 10% 税込〉
http://www.showado-kyoto.jp

私の日本初体験

林初梅（大阪大学）

台湾史に詳しい人なら誰でも知っていることですが、台湾では 1987 年に戒厳令が解除されました。若い世代が日本に対して持つイメージも、中華民国の抗日戦争記憶から、徐々に経済大国に移り変わりました。その年の夏休みに私は大学主催の日本語研修に参加し、渋谷の日本人家庭に１カ月ほどホームステイをしました。それが私の初めての日本体験でした。

このホームステイの経験は、日本人の温かさを感じさせてくれ、それと同時に様々な日本人がいることも知らされました。

私たち 50 人ほどの日本語研修団は日本に到着した後、まずホテルで一夜を過ごしました。翌日、私たちはどんな家族か分からないまま、ホストファミリーと一緒に寄宿先に向かいました。正直、不安な気持ちでいっぱいでした。日本人の家の風呂場には鍵が付いていないのが多いとも聞かされていたからです。

私のホストファミリーは、青山学院大学のすぐ裏に住む中澤さんという七十代のご夫婦でした。小さな一軒家の二階に私の部屋があり、毎朝、表参道から電車に乗って茗荷谷にある拓殖大学に行って日本語の授業を受け、午後は自由時間でした。

ただ私たち 50 人は、それぞれの体験が違っていました。というのも私のように１人でホストファミリーに受け入れてもらった学生は少なかったのです。２人で同じ寄宿先に泊まっていた学生もいれば、５人で同じ寄宿先に入った学生もいたと記憶しています。その５人グループの友人の話によると、ホストファミリーは隣に空きマンションを持ち、彼らをそのマンションに泊まらせました。５人はホストファミリーとの交流もコミュニケーションもほとんどない状態で一か月を送ったといいます。

もちろん５人は不満に思っていましたが、どうすることもできませんでした。それ以外は、ほとんどの人がホストファミリーの親切な対応に感謝し、よい印象をもっていました。しかし１人の友人はとても深刻でした。彼女によれば、毎晩夕食の時間に、ホストファミリーに、自分たちが食べ終わってからしか食べることができない、と言われたようです。そしてそれだけではなく、毎晩の食器洗いも彼女の担当でした。彼女の話を聞いて、私たちは理不尽さに腹が立ち、引率の先生に交渉してもらおうとお願いしたのですが、なんと先生は私たちにこう言ったのです。「君たちは本当に何もわかっていない。君たちは泊まらせてもらって、家事の手伝いが当たり前のことなのに、皿洗いがどうだというんだ。」

一方、私のホストファミリーの中澤さんは、私を自分の孫娘のように可愛がって、私が到着した日には、奥様がテーブルいっぱいにご馳走を用意してくださいました。小食の私にはとても食べ切れない量でしたが、たどたどしい日本語しかできず、丁寧な断り方も知らなかったので、相応しい日本語を考えて断るよりも、頑張って食べるようにしました。

老夫婦は本当によくしてくださいました。後日、中澤さんから聞いた話ですが、中澤さんは私を受け入れたことで、4000 円の日当を受け取っていたそうです。そのお金は私に使うべきものだと仰っていました。私が台湾に帰った後、祖父が中澤さんにお礼の手紙を出したことで二人の文通が始まり、中澤さんは、その後、来日する機会のあった祖父を、自分の家に泊めてくださいました。

ホームステイには良いホストファミリーと悪いホストファミリーがあり、選ぶことはできず、運に頼るしかありません。私自身が教師になった今、なぜ引率の先生は事情も聞かず、介入もしなかったのだろうかと思います。私が中澤家に着いた最初の夜、中澤さんは、「グルー

プ引率の先生が変わったね。前の先生は日本語がとても上手だったが、今の先生は日本語が駄目だ」と言っていました。その先生がなぜ交渉に行かなかったのか、日本語が苦手だったからなのかは分かりませんが、そのせいもあって、私たち一緒に旅をした 50 人は、日本という国、日本人の温かさと冷たさについて、まったく異なる初体験をすることになったのでした。

樹林から士林へ――移動のなかの記憶の断片

菅野敦志（共立女子大学）

私が台湾に初めて行ったのは 1991 年の夏、高校２年生だった。留学していたアメリカから、今はなきノースウェスト航空に乗り、成田経由で中正国際空港に着いた。１年前から単身赴任していた父親と出向先の台湾の会社の人が一緒に迎えに来てくれた。父親は日本のメーカーから、技術提携を結んでいた台湾の東亜通信という会社に品質管理の工場長として出向していた。ここから父子２人、1993 年夏まで２年間の台湾生活が始まった。

東亜通信の工場は台北県樹林鎮（現：新北市樹林区）にあった。父親は樹林駅から徒歩圏内の屋上階に住んでいたが、確か違法建築だった。窓から激しいスコールを眺め、南国に来たのだと実感した。大手メーカーや商社ではなかったため、駐在員的な豪華生活ではなかった。部屋には小さな蟻やゴキブリ、そして大きな蜘蛛が出現した。私も東北の実家では庭で虫いじりをして育ったが、さすがに手のひらサイズの黒蜘蛛が部屋のなかで出たときは度肝を抜かれた。また、寝ぼけ眼で目覚めたら目の前を大きなゴキブリが滑空していった。ゴキブリは「飛ぶ」のだと知った。

樹林駅前には臭豆腐の屋台があった。電車で台北に行き、樹林に戻るといつも臭豆腐の香りに迎えられた。樹林の市場は現地感に溢れていた。小さなブラウン管テレビで中国語の歌番組を観た。歌手名と曲名を書き取り、樹林の CD 屋で郭富城の『我是不是該安静的走開』を買った。初めて買った中国語 CD だったが、当時はまだ彼の広東語なまりがよくわからなかった。必死に練習して歌った。

私は台北アメリカンスクール（TAS）に編入することとなった。けれども、樹林からは到底通えないので、「樹林（シュウリン）」から「士林（シーリン）」へ引っ越しすることになった。「樹林」から「士林へ」―どちらも巻舌音で、私の初修中国語が試された。けれども、台湾の人の発音では、樹林（スゥリン）から士林（スーリン）だった。父親は、タクシーで樹林に戻ろうとして、樹林（スゥリン）と言ったつもりが、士林（スーリン）に連れていかれたことがあったと苦笑いしていた。日本人が樹林に住んでいるとは思わなかったのだろう。運転手の気持ちもよくわかる。

士林では、中山北路六段の３LDK に一人暮らしをしていた東亜通信の張さんの家に２人で間借りさせてもらった。そこでもゴキブリがよく出た。夜中にトイレに行くと暗闇に大きいのが待ち構えていて、いつもビクビクしながらトイレに入った。TAS には歩いて行ける距離だったが、父親は士林から樹林までの長距離通勤になってしまい、申し訳なかった。TAS では私と入れ違いで退学した金城武くんをカフェテリアで見かけた。目の前の日本人学校から TAS に入った友達は、「あんな整った顔の人はいない」と彼を絶賛していた。あの時点では彼がその後世界的スターになるとは想像もしなかった。努力すれば成功はつかめるのだと、勝手に金城くんから教わった気持ちになっている。

中国語の歌をKTVで歌うと友達に言ったら、まだ台湾に来たばかりなのに珍しいと言われた。台湾生まれの日本人の同級生には、中国語ができない子もいた。もったいないと思ったが、自分の意思で台湾に生まれ育ったわけではないというせめてもの抵抗、意思表示だったのだろうか。

樹林から士林へ。外から見たら似た地名でも、なかは異なる世界だった。樹林の床屋で、言葉が通じない16歳が不安のなかでカットしてもらったものの、仕上がりに落胆してとぼとぼと帰宅したことを思い出す。士林に移ってからは、そごうのなかの日本人経営の店で切ってもらった。高校生には値段が高かったが、譲れなかった。今、49の私は坊主頭なので、もうそのような心配事はない。30数年前の記憶の断片を集めて再構築されるはじめての台湾は、今の私の眼には淡く綺麗なモザイク模様として映る。

はじめて台湾へ行ったとき：詩人・林亨泰を訪ねて

三木直大（元・広島大学）

昨年９月、100年近くを生きて詩人の林亨泰が亡くなった。思えば、私がはじめて台湾に行ったのは、1994年８月の林亨泰訪問だった。同年代の学会員のなかでは、かなり遅いほうだろう。台北だけの一週間にも満たない短い滞在だったが、それからはコロナ禍が到来するまで、毎年いちどは台湾にいくようになった。

1990年代の初め、勤務校で大学院のゼミを担当するようになった。当時は全学で唯一の中国語現代文学を扱う授業科目だったからだと思う、もちろん現代中国文学専攻の大学院生もいたが、自分の専攻からは離れて文学好きであったり、野次馬的にであったり、息抜きであったり、単位を揃えるためであったり、留学生がたくさん受講してくれた。そのなかに台湾からの留学生もいた。いちばん多かったかもしれない。1960年代中頃生まれの世代がほとんどだったと思う。学部を終えてすぐの人もいれば、退職してキャリアを求めての人もいた。

最初は当時の私が研究していた現代中国の詩人や作家をテーマにしていたが、やがて留学生たちにいちばん関心をもっている文学作品や映画について発表してもらうようになった。同時代台湾の作家や詩人について、いろんなことを教えてもらった。そのなかに日本の前衛演劇を研究している留学生がいて、林亨泰の詩について発表した。留学生の名前は林于竝。林亨泰さんの長男である。近年は平田オリザの「東京ノート」の翻案「台北ノート」の横浜美術館公演のドラマトゥルクなどで日本でも知られる研究者・演劇人である。70年代後半の東京での大学院生時代に詩人・葉笛との交流はあったが、林亨泰を知ることで私の中国語圏現代詩研究が台湾文学研究とひろがりをもってつながっていった。

台北の街はあちこちで工事をしていた。ホテルの窓からみえる台北駅周辺は、地下鉄や地下街の工事現場だらけだった。林亨泰さんはご夫妻で彰化から出てきてくださった。映画館で並んで座って呉念真監督の『多桑』を観た。観客席からときおり漏れる失笑に近い笑い声に、林亨泰さんは日本語で言葉を選びながら、あの笑い声は複雑なんですと呟くように教えてくれた。授業に顔を出していた留学生が、九份と基隆にドライブにつれていってくれた。道路沿いに廃棄されたゴミの山や海岸を汚している工場廃液に、いっしょに眉をひそめた。留学生の一人がお母さんからだと大きなタッパーに詰めて持ってきてくれたスライスしたマンゴウが、とてつもなくおいしかった。そうした光景はいまでも鮮明に覚えている。侯孝賢や楊徳昌の映画

をとおしてしか知らなかった台湾の風景が、私のなかで具体的な像を描きはじめた。台湾映画の細部への関心も、『恋々風塵』に主人公の映画館で働く友人役で出演していた林于竝さんに導かれたところが多い。そして私がいちばん最初に台湾で林亨泰について発表したとき、隣に座ってサポートをしてくださったのは、やがて林亨泰について本を書くことになる長女の林巾力さんだった。

1995 年に林亨泰さんは脳溢血で倒れたが、驚くべき回復をみせた。「私を通して可能になる人の存在／私の成立が可能にする人の存在」という末連をもつ復活の詩「人の存在」は、出発期の詩「にんげんの悲哀」と接続し、詩人としての生を粘り強く構築しようとする力動的な作品だった。私は 2006 年に『越えられない歴史　林亨泰詩集』（思潮社）を出版した。限られた紙幅のなかに、どう作品を選び配置するかをめぐって、何度か手紙の交換もした。電話もした。彰化も、何度か訪れた。そうしてできあがった、おおよそ 60 年間に及ぶ作品を集めた詩集は、こんな言い方をすると林亨泰さんはきっと苦笑するだろうが、詩人の日本語詩と私の翻訳詩が合体した共同作業のような詩集になった。そのやりとりのひとつひとつを、いま私はときどきの詩人の顔を思い浮かべながら、再現し考え直す作業にとりかかっている。

1996 年３月　台湾

冨田哲（淡江大学）

古いパスポートをめくると、初めて台湾をおとずれたのは 1996 年３月９日から 21 日のことである。修士課程が終わり博士課程への進級をひかえた春休みだった。この時期にピンと来る方も多いだろう。初の大統領直接選挙の投票日が３月 23 日だった。

大学院には何人かの台湾人の友人がいたし、教えていた日本語学校の経営者夫婦は台湾出身、台湾人の同僚、職員そして学生にもよくしてもらっていた。ごく自然に台湾に対する関心が高まっていったのだと思う。修士課程の同期二人とともに台湾旅行をくわだて、やはり同期のＺさんとＹさんの実家（それぞれ新荘と高雄）に泊めてもらうことにした。

名古屋から直接台北に飛ぶのもつまらない、船で行こうという話になり、３月８日の晩に那覇を出て、10 日朝に基隆に到着する予定だった。８日昼に那覇に着き、泊港で荷物をあずけた後、市内観光に出かけた。しかし、である。港へ戻ると、カウンターには「宮古、石垣以遠は抜港となります」との張り紙が（「抜港」ということばを初めて知った）。中国軍の演習の影響で、石垣止まりになるというのである。結局、那覇で一泊して翌日の飛行機で那覇から台北に入るという、何とも費用のかかる経路になってしまった。やはり船に乗れなくなった台湾人のかつぎ屋のおばさんの手伝いを軽々しく引き受け、桃園空港で荷物をわたすと、「ともだち、ともだち」と両手をにぎりながら満面の笑顔で感謝された。

選挙の光景はやはりよく覚えている。国民大会代表の選挙も同時におこなわれており、のぼり、ポスター、横断幕が街中にあふれていた。新荘の中正路だったと思うのだが、大統領候補の陳履安の車列が通り過ぎるのに出くわした。結果として最下位、１割に満たない得票率の候補者だったが、前後につらなる車やオートバイがなかなか途切れず、その派手さ、にぎやかさに面食らった。

高雄滞在中、近くに国民党の選挙本部があるから行ってみようとＹさんに誘われ（Ｙさんは国民党支持ではなかったはずだが）、興味津々で出かけた。受付に行くと歓迎され、選挙グッズや

食べ物をたくさんもらった。李登輝や連戦が来ているわけではなかったが、会場には多くの人が集まり、ステージ上では入れ代わり立ち代わりスピーチが続いていた。ドイツから選挙を見に来たという学生、また石田浩先生の指導生だという学生もおり、「今日は海外からもお客さんが来ています」と支持者の前で紹介されてしまった。

Ｚさんの親戚が海鮮レストランを最近開店したとのことで、北海岸のある町の、台湾海峡をのぞむ店におじゃました。けっこう飲めるクチだなどと口走ってしまったがために「乾杯、乾杯、再乾杯」となり、見事にＫＯされた。ふらふらになりながらも、「大陸」の漁船と海上で取り引きをしている、この酒もそれで手に入れて来たものだ、といった話は深く脳裏にきざまれた。

中正記念堂では人形かと見まごう立哨の衛兵や、かれらの一糸乱れぬ動作に驚く一方で、観光客の整理にあたっている警察官の気さくさが対照的でおもしろかった。交代が終わった後、関西から来ているらしい観光客が、「すごいなあ、共産主義の国は」と厳粛な雰囲気に圧倒された様子だったが、それを聞いた別の人が「アホ、台湾は共産主義ちゃうで」とすかさずツッコんでいた。韓国からの団体客が号令に合わせて花輪を蒋介石の銅像の正面にそなえていた。台湾と韓国の断交からまだ数年、退役軍人の団体だったのだろうか。

旅程の前半はＺさんが台北を中心に連れまわしてくれ、その後はＹさんの案内で台北から台中、中横公路を経由して花蓮へ、そして台東をまわって高雄にたどり着いた。二人ともわれわれを楽しませるために頭をひねり、また各方面に話をつけてくれたのだと思う。

2000 年からは台湾に住み、ほどなくゲスト気分も薄れた。旅行中、無邪気にあれやこれやをおもしろがっていた自分を思い出すと、「所以怎様？」と冷たくことばをかけたくなる。２週間有効のビザなし滞在許可がおされたパスポートを見ながら浮かんでくるのは、実に陳腐ではあるが、当時大学の研究室の机の前に貼っていた「光陰似箭」ということばである。しかしまちがいなく 30 年近くが過ぎた。４組の正副大統領候補者のうち４人はもうこの世にはいない。Ｚさんは数年前に病魔に倒れ帰らぬ人となった。

現実と想像が溶け合う街の風景

呉穎濤（大阪大学）

私の日本と台湾への深い関心は、中学時代の読書体験に根ざしている。中学１年生の時、担任である香港中文大学出身の中国語文科の先生、陳先生（ミス・チェン）によって、文学の奥深い世界へと導かれた。魯迅や香港の作家、也斯（梁秉鈞）、小思（盧瑋鑾）らの作品に触れ、特に陳先生にもらった白先勇の小説『孽子』は、私に台湾文学への扉を開いた。中学２年生からは、「文学青年」として、さらに多くの小説や映画に触れるようになり、台湾の文学と並行して、英語版の村上春樹の作品にも没頭した。村上の描く日本のレストランやカフェのシーンでは様々な不思議な出来事が起こり、私にとって非常に魅力的だった。そして、いつか自分が触れた物語のような場所を実際に訪れ、その雰囲気を体験してみたいという願望を抱くこととなった。

高校時代（2010 年前後）には、旅好きの叔父によって、台湾と日本へ旅行に行く機会に恵まれた。台北では、ガイドブック代わりに朱天心の小説『古都』を手に街を散策した。1996 年の作品である『古都』は、京都を訪れたヒロインが、台北に戻り、日本統治時代の台北の地図を手がかりに、台北という都市における失われた過去の風景や場所を探そうとする物語だ。当

時、万華の格安ホテルに宿泊した私は、「万華」という地名が日本統治時代と関係があることは知っていたが、街並みを見ても、日本統治時代の面影などは感じられず、ただ近代的な中華圏の街並みがそこにあるように思われた。もしかするとこれも、『古都』で描かれたような、失われた街の風景や記憶といったものなのだろうかと考えた。また、私は台北で、現実と文学作品の世界が重なる不思議な体験をした。『古都』には、ヒロインが総督府近くの学校に通っていた頃の、クラスメートとの同性愛的な関係を示すような部分がある。私が総統府から歩いて二二八和平公園を通り、朱天心の母校でもある一女中（台北市立第一女子高級中学）のバス停で帰りのバスを待っていた際、向かいのバス停に、学校帰りでバスを待っていると思われる二人の女子生徒が見えた。二人のうち一人が先にバスに乗って帰ったのだが、二人が別れ際、ただの友人同士というには少し長い、感情のこもった抱擁を交わした姿に私の目は釘付けになった。この光景を見た時、思わず『古都』でのヒロインと昔のクラスメートとの関係を思い出し、現実と文学作品の世界が溶け合うような、奇妙ともいえる感覚を覚えずにはいられなかった。

不思議なことに、こうした感覚は台北で幾度も感じられたのだ。2007 年に亡くなった映画監督・楊德昌の 1994 年の作品『エドワード・ヤンの恋愛時代（原題：獨立時代）』の最後で、ヒロインが別れた恋人に見送られる際、「いつか FRIDAY にコーヒーでも飲みに行こう」という会話をする。彼女が去ったように思われた直後、二人ともやはりすぐ戻り、彼女の「FRIDAY にコーヒーを飲みに行かない？」という言葉で、ヒーローはヒロインを抱きしめる。しかし、私が台北でついに念願のフライデーズ（TGI FRIDAYS)を訪れた際、メニューにはステーキやカクテルといったものしかなく、コーヒーなどはないことに気がついた。時代が変わりフライデーズのメニューなども変わったのだろうかなどと思ったが、実際は、フライデーズでは昼の時間帯にはコーヒーがあるが、私が店を訪れた夜の時間帯にはコーヒーがなかったということがわかった。映画のシーンは、ちょうどまだ明るいうちで、二人がコーヒーを飲みに行くなら「いま」しかないことが示されていたのではないか、つまり、彼らは別れようと言いながら、そんな気がなかったのではないかと考えた。フライデーズでそれを考え、私はご飯を食べながら思わず笑みを浮かべた。

また、私が日本で京都を訪れ、私を含め多くの観光客で混雑したバスに乗った際、悠久の歴史を持つ古都の雰囲気などはあまり感じられなかった。しかし、八坂神社から河原町まで歩いて行った際、『古都』でヒロインが京都を訪れた際にコーヒーを飲んだドトール（Doutor Coffee）やフォション（FAUCHON）というカフェが見えた。ドトールに入ってブレンドコーヒーを飲むと、外の喧騒から離れた落ち着きを感じた。ヒロインがそこでコーヒーを飲んだ時に言った、「ただいま」という言葉にも納得することができた。これらの経験は、『古都』で表現された、台湾人が日本に対して抱く感情を理解するきっかけとなった。それはまた、香港で「イギリス国民（海外）」のパスポートを持ち、中学校五年制・予科二年制というイギリス式の教育を経験した私自身を理解することにも通じるのではないかと思い、日本に留学することを決めた。留学生活を通じて、日本各地や台湾の様々なカフェやレストランを訪れ、その独特の雰囲気に浸ることは、私にとって大切な習慣となっている。

私の日本と台湾への旅は、現実と想像が織りなす原風景の中で、実体験と文芸作品が融合する特別な体験を提供してくれた。これらの地で感じた、過去と現在、想像と現実の間の橋渡しは、私の学問的探求への情熱を深め、それぞれの地に対する理解に空間的な奥行きをもたらしている。

台湾文学聖地巡礼の年

白井魁（一橋大学・院生）

――去過這麼多地方，是不是真正感受過這個世界，有時，自己都不確定。

この言葉は台湾の航空会社 EVA 航空の CM 内に登場する金城武のセリフである。私が初めて台湾を訪れたのは 2015 年の夏のこと。修論執筆のために、現地を訪れて資料等の収集をするためであった。搭乗を待つ羽田空港内で、金城武のこの言葉を何度も反芻しながら、次のような気持ちを胸に抱いていた。これからたくさん台湾を訪れるだろう。でも、自分はどれだけ台湾を感じることができるのだろうか。この初めての訪台で、できるだけ多くのことを感じてみたい。

実は、初めての台湾訪問で、大稲埕の波麗路やかつて存在した山水亭を探し求めたことについては、本学会ニュースレター第 38 号ですでに述べている。重複を避けるため今回は割愛するものの、結論から言えば、初めての台湾の旅は一種の聖地巡礼でもあった。

松山空港に降り立ち、台北市内に向かうとそこは夢にまで想像した姿の台湾が待っていた。街のいたるところに存在する蔡依林をはじめとした台湾の芸能人たちの広告。どれも、かつて中国語の勉強のために見たドラマの出演者や聴いた流行曲の歌手たちであった。当時は『我的少女時代』も公開されており、台北駅にはその大きな広告も掲げられていた。

少し歩いては、立ち止まり食べ物を買ってみる。珍珠奶茶、牛肉麺、葱油餅、割包、大腸包小腸、魯肉飯……。ミーハー心もあって、そういった広告や食べ物をひとつひとつ写真に収めながら、そのことで自分は本当に台湾に来たのだと実感していた。牛肉麺を買う際に、整理番号が渡され、なんのことかわからずオロオロしていたことも覚えている。

そんな観光客さながらの食べ歩きをしていたら、いつの間にか二二八和平公園に辿りついていた。園内をめぐりながら、碑文などを読むと途端に、これまで学んできた台湾の歴史や呉濁流作品の描写が脳内を巡ってきた。書物で読んできたことが、この時初めて一種の「リアル」なものとして目の前に立ち現れてくるような感覚を覚えた。

そこからは大学や図書館、本屋でいちいちそのような感覚に陥ることになる。初めて見る実物の『台湾文芸』（呉濁流創刊）、雑誌『美麗島』、黄春明『莎喲娜啦・再見』、王詩琅全集……等々。日本でこれだけ台湾や台湾文学に関する書物に囲まれる場所はあるのだろうか。この訪問は、まさに台湾および台湾文学の世界を尋ねる旅だと強く感じた。聖地巡礼は、場所というだけでなく書物に対する聖地巡礼でもあったのだ。

もちろん、文字通り、実際に「場所」を訪れるということもしている。先述した大稲埕もそうだし、艋舺を訪れたのも、王詩琅がかつて住んでいたからであった。また九份では『悲情城市』や『多桑』に思いを馳せた。ミーハー心もやはり捨て切れず、優客李林が歌う『認錯』の MV に登場する台北駅前の陸橋を探して彷徨った（すでにその陸橋はなくなっていたのだが）。

およそ一週間の滞在は、こうして自分にとっての「聖地」を巡ることで過ぎ去っていった。最終日の夜は資料や本を、宿のベッドにいちいち並べて、中身を少し読み、出てくる土地の名を目で追いながら、ここには行った、あそこには行けなかったと笑みをこぼす。最後は黒松沙士で乾杯。そのため、いまでも黒松沙士を飲むと、最終日の夜のことを思い出す。

帰国当日、夕焼けに染まる松山空港で飛行機を待ちながら、冒頭の金城武のセリフをふたたび反芻した。この旅で、どれだけ台湾を知ることができたのだろうか。まだわからない。だからこれからも、たくさん訪れなければならない。そのように強く思った。

この旅で得た資料をもとに、翌年の１月修士論文を書き上げる。初めての台湾訪問からおよそ三ヶ月後のこと。なお、修士論文を脱稿したその日、台湾では中華民国総統選挙および中華民国立法委員選挙が行われた。

好奇心の拠点、台湾との出会い

長屋敦大（愛知大学・院生）

私は 2019 年の春から夏にかけ、台湾・台北へと渡り、約半年間の留学生活を送った。実のことを言えば、この前の１年間で、私は２回ほど台湾へ行っており、厳密に記録しておくとするならば、はじめて行ったのは 2018 年の春ということになる。しかしながら、今考えると、この留学前の渡航はあくまで序章にすぎず、この留学を経て本当の意味での「出会い」を果たしたように感じている。

私は当時、中国語圏への留学が必須という学部に所属していたため、留学の機会を得ることができた。しかしながら、中国語圏への留学と言えば、候補として真っ先に挙がるのは中国大陸であり、派遣人数もそちらのほうが多かった。そんななか、私は敢えて台湾を選んだのであった。台湾を選んだ理由としては、「環境が良さそう」といったことや、「親しみがある」など、色々あったが、特に自分の中で決め手となったのは、「“定義できていないこと”が多く存在していそう」と感じたことであった。ちなみに当時の私の台湾に対する理解としては、「新幹線をルーツに持つ高速鉄道が走っている」、「スマートフォンなどのハイテク産業が盛ん」、「繁体字を使っている」、「オリンピックなどの場ではチャイニーズタイペイと呼ばれている」、「国家とは認められていないということがあるらしい」というようなものであり、決して深い理解があったとは言い難いものの、「気になる存在」であったということは確かであった。

留学自体は１セメスターほどの語学留学であったが、非常に多くの経験を得た。なかでも私にとって大きな関心事となったのは、台湾の言語文化と社会についてである。

毎日の中国語の授業では、繁体字で勉強をし、漢字の奥深さに触れた。私の場合は、日本の新字体から入り、学部で中国語の勉強を始めてから簡体字を習い、台湾で繁体字を習ったという漢字遍歴を辿っているが、漢字文化圏に生きる者として、こうも贅沢な経験は無いと感じている。留学当初は「画数が多い」と不安に感じたり、「簡体字のほうが効率的ではないか」とも思っていたものの、今では繁体字でないとなんとなく落ち着かない。

台湾は「国語」、「華語」、「繁体字」、「注音」、「台湾訛り」、「方言」、「原住民諸語」、「中国語と英語との双語」など、言語に関するキーワードだけでも相当な数となるほどの多彩さを持っている。私はこうした台湾の言語文化から影響を受け、台湾のことを研究する中で、興味を広げることへもつながった。実際、繁体字や方言という面からは、同じく繁体字を使用する香港へ興味を持ったし、広東語をはじめとする中国語の方言にも関心を持ち、勉強するようになった。興味はさらに派生して、その他の外国語への興味関心へとつながっている。

また、留学中は大学内の宿舎で生活していたのだが、そこでも「出会い」があった。それは、私の現在の主な研究テーマである「台湾における新移民・新住民」を見つけた瞬間でもあった。

その宿舎では毎週一回、清掃の日があり、清掃業者の方が私の外出中に部屋の掃除をして下さっていたのだが、その多くが東南アジアをルーツに持つ人であったのである。私は当時話題になっていた”双語”の潮流に乗り、台北の言語交換カフェに通うなどして英語も強化するよう励んでいたため、その清掃担当の方と英語と中国語を交えて交流を行っていた。そのような経験は、「新移民」、「新住民」に関わることについての興味・関心へとつながり、更に派生して「国際化」や「グローバル化」、「グローバル資本主義」などといったことへの問題意識へとつながっている。

こうして振り返ってみると、私は台湾での経験をある種のゲートウェイとして、興味や関心を派生させているような感覚がある。台湾は私にとって、好奇心の拠点なのではないかと思う。台湾の言語文化や社会には、間違いなく“定義できていないこと”が多く存在しており、この出会いを通じて、その一端を知ることができたと感じている。それらを定義していくべきか否かはまだわからない。しかしながら、これからも、「台湾」を拠点に、あらゆることへ好奇心を持ち、探究を続けていきたい。そう強く思っている。

台湾における「日本」の過去と現在
――糖業移民村を視座として
■[著] 野口英佑　日本統治時代を経験した台湾の人々、そして現代台湾社会において「日本」はどのように位置付けられ、どのような意味を有しているのか。かつて糖業移民村であった龍田村の神社の再建を通して見えてくる、重層的な台湾社会の相貌。　●2、970円

コレクション・台湾のモダニズム 第I期 全20巻
■[監修] 和田博文／河野龍也／呉佩珍／冨田 哲／横路啓子／和田桂子
日台双方の膨大な一次資料から重要文献を厳選。モダニズム資料の決定版。第一回・全4巻＝①台湾総督府の植民地統治（呉叡人編）②日本・南支・南洋への航路（和田博文編）③台湾縦貫鉄道と交通網（蔡龍保編）④モダン都市景観（李文茹編）　●各19、800円

記号化される日本
――台湾における哈日現象の系譜と現在――
■[著] 張瑋容　台湾における「日本オタク」を理論的に分析し、インタビューやフィールドワークと理論的分析を重ねながら、その多様な対日感情構造を解読。「哈日現象の最中に中学生になった」社会学者による、台湾における、〈日本〉の記号学的分析。　●8、800円

近代台湾都市案内集成
■[監修・解説] 栗原純／鍾淑敏……全20巻●揃363、000円
様々な視点で台湾を紹介した一八九七年～一九四二年の文献を収録。
●第一回配本：『台湾鉄道旅行案内』シリーズ　全6巻・揃　90、200円
●第二回配本：台湾全般の案内記　全6巻・揃118、800円
●第三回配本：台湾各地域・都市の案内記　全8巻・揃154、000円

ゆまに書房　〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6　http://www.yumani.co.jp/
TEL.03(5296)0491　FAX.03(5296)0493　※税込・パンフレット進呈

総統選挙観察

2024 年総統・立法委員選挙観察記録

五十嵐隆幸（防衛研究所）

本稿をご覧になっている皆さまに、台湾の選挙の盛り上がりを語るのも釈迦に説法でしょう。結果はご存知の通り、民進党の現職副総統・頼清徳氏が総統選挙に勝利し、1996 年の総統民選化以降、初めて同一政党の政権が３期続くことになりました。他方、立法委員選挙では、国民党が民進党から第一党の座を奪い返しました。しかし、二大政党とも過半数に届かず、初めて国政選挙に挑んだ柯文哲率いる民衆党が８議席を獲得し、キャスティングボートを握ることになりました。日々、台湾の現地紙を読み込んでいれば、この結果は概ね予想できていたかもしれません。とは言うものの、選挙戦期間中に現地で様々な人の話を聞き、それを踏まえて分析すると、この予想を裏付けるような実態が見えてきます。

さて、いかにも台湾の選挙専門家のように語り始めましたが、台湾の選挙戦期間中、もしくは選挙を意識して訪台するのは今回が初めてです。訪台したのは 11 月下旬で、メディアを通じて日本でもお馴染みのあの熱狂的な選挙集会は始まっていませんでした。しかし、思いがけず注目を集めた「藍白合」騒動を現地で体感することができました。この立候補届け出期間に訪台のタイミングを決めた…と言えば、専門家っぽく聞こえがいいのでしょうが、極めて機械的に訪台時期を決めました。2023 年度より、東京外国語大学で非常勤講師として小笠原欣幸会員の「中台関係論」を引き継いでいるのですが、小笠原会員から引き継ぎをしている時、「例年、外語祭で授業が無い週に現地調査をしている」と聞き、「選挙の神」の現地調査をこの目で見て体感できるチャンスなんて滅多にあるものではなく、これを逃したら一生後悔すると思い、訪台の計画を練り始めました。

また、今回の総統選挙に際し、小笠原会員が主催する月１回の研究会に参加していたのですが、ちょうど 11 月の研究会の日、あの４者会談のニュースが飛び込んできました。10 月までの研究会では「藍白合」は無いだろうとの見立てでしたが、まさかの展開にメンバーは驚きを隠せませんでした。その日は、ちょうど私が報告担当で、選挙に関連したディスインフォメーションや統一戦線工作について報告したのですが、この衝撃の裏に何かしらの動きがあるのかと疑うようなタイミングの出来事でした。

このように話題が「藍白合」一色のタイミングで、私は台湾を訪問しました。１週間の訪台期間、小笠原会員は後から追いかけてくる形になったので、現地調査に同行するのは後半の僅か 3 日間となりました。そのため、前半は私の専門とする政治史関連の予備調査をすることにしました。Covid-19 明けで往来に制限が無くなりましたが、この３年間を挟み、史料調査環境にも変化がありました。例えば、Covid-19 は関係ありませんが、国民党党史館で中央常務委員会会議議事録が閲覧できなくなり、政治大学の孫中山紀念図書館に行かねばならなくなりました。期間が短かったこともあり、本格的な史料調査を再開する前の準備にとどまりましたが、関連する大学教員と意見交換をするなかで選挙について話題に上がりました。私の得た感触としては、今回の選挙で多くの若者が民衆党を支持しているという印象が強かったのですが、依然として民進党を支持する若者も多いように感じました。学生か有職者か、地域性が関係しているのか、現地での意見交換を通じ、一概に「若者」と括れない実態を感じることができました。

さて、訪台期間の後半、いよいよ「選挙の神」の調査に同行することになりました。初日は、主要３党が一議席を争う宜蘭県選挙区を訪ねました。そこで衝撃を受けたのは、各候補者が語るのは地域特有の問題ばかりで、ほぼほぼ中台関係が争点になっていなかったことです。世論調査では、民衆党の現職立法委員（不分区）の落下傘候補が劣勢、国民党と民進党の現職県議会議員が拮抗していました。結果を先取りすると、民進党候補が競り勝ったのですが、立法委員選挙は台湾を率いるリーダーとしての資質よりも、地域の課題を国政の場で提起し、解決に導く力が問われる要素が強いことを学べる絶好の事例でした。

二日目に訪ねた桃園市の某選挙区は、三期目を目指す民進党の現職立法委員（50 歳）に対し、国民党の現職桃園市議会議員（33 歳）が挑む二大政党による一騎打ちの構図になっていたのですが、今回の選挙で民進党が苦戦し、国民党が得票を伸ばした要因を肌で感じることができました。民進党の候補者は、地域の問題への関心は薄く、国政の重要性を訴えていました。他方、国民党の候補者は、現職市議としての優位性もあるのでしょう、地域特有の問題解決を掲げていました。まさに、蔡英文政権の２期８年を通じてエスタブリッシュメント化した民進党に対する忌避感と、国民党の若手新人候補への期待が高まる選挙戦で、結果はあらかたの予想通り、国民党候補が初当選を決めました。

最終日は、新北市と台北市の某選挙区を回りました。台北市の某選挙区は、国民党と民進党の現職市議会議員と、民衆党に近いとの見方がある無所属候補による三つ巴の戦いとなっていました。選挙結果は、「老国民党」を体現するような印象の国民党候補（61 歳）を民進党の女性候補（36 歳）が僅差で逃げ切って勝利を収めました。この選挙区は、前々回 2016 年と前回 2020 年を通じて築かれた台湾の選挙のイメージ通りの構図だと言えるでしょう。反対に、新北市の某選挙区は、二期目を目指す国民党の現職立法委員（40 歳）に対し、民進党の元新北市議会議員（50 歳）が挑む二大政党による一騎打ちの構図でした。結果は、国民党の候補者が全国最高得票で当選し、初登院の２月１日以降、国民党立法院党団で活躍する彼の姿を見ると、国民党の世代交代が進んでいる様相がうかがえました。

ここまで備忘録のように選挙観察日記を綴らせていただきましたが、その感想として特筆すべきは「若者の高い政治参加意識」です。50 代の友人が「自分より若い世代に期待している」と語っていたのも印象的でした。一方、前回の選挙で「若者の代表」とも言われていた人が、今回では既に古い世代というイメージがもたれていたのにも驚きました。台湾政治は変化のスピードが速いとも言われていますが、この選挙観察を通じて垣間見ることができました。そしてもう一つ、明言こそしていませんでしたが、「立法委員選挙で投票してくれさえすれば、総統選挙は〇〇党の候補者に票を投じるのは容認できる」という雰囲気が漂っていたことです。なるほど、総統は 2 任期 8 年までの制限がありますが、立法委員には任期制限が無い、総統が如何なる政党であろうと、自らは立法委員に当選し、政治に携わり続けることが重要という考え方があるのです。台湾の有権者の投票行動について、小笠原会員は、台湾の民主主義は「オレ様」「お上」「あっさり」の三つの要素が結びついていると分析していますが、立候補者にもその要素が当てはまるのかもしれません。

73 選挙区（不分区と原住民を除く）すべてを観察し、結果を予想できる研究者は、後にも先にも小笠原会員だけでしょう。ただ、台湾学会の会員であれば、誰もが馴染みの地域があるはずです。次の選挙では、その地域の選挙区で、どのような選挙戦が繰り広げられるのか観察してみては如何でしょうか？

「敗者なき選挙」だった台湾の総統選・立法委員選

野嶋剛（大東文化大学）

１月に行われた台湾の総統選挙、私にとっては 2008 年、2012 年、2016 年、2020 年について 5 度目の「密接観察」の機会となった。

過去の反省も含めて心がけているのは一つ。投票日の直前に起きたことについては、基本は過大評価しない、ということである。

海外のいわゆる「観選団」はだいたい１週間前から現地に入り、投票日の３日前ぐらいから続く各政党による各地の大規模選挙集会を見て、投票結果を見守ることになる。

この時期では世論調査はすでに公表が禁止されているので、集会の盛り上がりがポイントになるとついつい思い込みがちだ。台湾の選挙は確かに「熱鬧（にぎやか）」さが特色のイベントであり、その熱気に巻き込まれて「民進党の集会はすごかったから民進党が逆転する」などと考えてしまう。確かに集会には参考になる部分はある。ただ、選挙直前になると、有権者はほとんど投票行動を決めているので、盛り上がり自体が結果を左右することはない。

例えば、今回の選挙では、台湾民衆党の集会はあまり参加者が多くないことをもって民衆党の得票は伸びないと感じた人も多かった。だが、実際には、総統選でも、立法委員選の政党票でも、民衆党は予想以上の善戦を見せて台風の目となった。民衆党の選挙戦略はもとより「在宅革命」を目指したネット中心の働きかけを大事にしていたこともあった。いずれにせよ「外行看熱鬧（素人は賑わいだけに注目しがち）」という戒めは今回も生きていたように思う。

今回の選挙はいくつかの意味で異例の展開だった。三つ巴の構図が最後まで崩れなかったこと。二期８年を務めた与党の民進党がそれでも有利に総統選の戦いを進めたこと。中国の選挙への「介入」が認知戦と呼ばれるネット領域で展開され、「中国要素」が過去になく「インビジブル」であったことなどだ。

そのなかで、有権者の関心も「経済」「与党（民進党）の腐敗」「格差」「地価」などの、いわゆる「台湾の在り方」を問いかけるものがいささか後退し、どこの国にもあるような台湾社会の諸課題を議論することに傾いた。前述のように中国の介入の非可視化という要素もあるが、それ以上に、台湾において「現状維持」路線を手堅く成功させた蔡英文政権８年を経て、現状維持以外の選択肢を論じるモチベーションが薄まり、中国問題が争点になりにくかったことが大きかった。

私が今回の選挙で民進党の選挙戦略上の失敗だと感じたのは、蔡英文と頼清徳の現職・次期総統候補の「合体」という切り札の発動が遅れたことだ。蔡、頼両氏が自動車に乗って台湾を走る選挙 PR 動画【在路上】があと１ヶ月早く公開され（実際の公開は１月２日）、２人の協力・継承を打ち出せていたら、民進党が「惨敗」した立法院の結果も多少は変わっていたかもしれない。動画だけではなく、選挙戦で一緒の舞台に本格的に並び始めたのは 12 月に入ってからだ。２人の協力が遅れた理由は、私なりの結論は、2019 年の総統候補党内選挙の際、蔡英文に頼清徳がチャンレンジしたことなどに関係して、お互いの感情面でしこりが残っており、双方ともギリギリまで「合体」を言い出せなかったことが大きかったようである。

２人は総統・副総統になっても、お互いの役割を固く守って衝突はなかったが、細やかで親密なやりとりがあったわけではなかった。蔡英文の人気と頼清徳の人気は異なる層に広がっている。党を超えた幅広い広がりを持つ蔡英文と、党の中枢の台湾意識の強い人々に人気がある頼清徳は、本来ならば民進党にとって集票という意味で相互補完性の高いコンビであるが、その利点を活かしきれなかった。開票日、総統として勝利した頼清徳の笑顔は、非常に硬いもの

で、立法院での敗戦への不満の感情を押し殺しているように見えた。彼の幕僚に後日聞いたが、立法院であそこまで議席を減らすとは本人も思っていなかったという。

今回の選挙について、私はメディアからの問い合わせに対し、「敗者なき選挙であった」と総括した。民進党は総統選挙では勝利したので敗者ではない。国民党は立法院の相対第一党を取り返し、党の長期低迷に歯止めがかかった。朱立倫も主席を辞めてはいない。民衆党も立法院のキャスティングボートを握った。この野党二党も敗北とはもちろん受け止めていない。だが、はっきりと勝利宣言できる政党もなかった。米国も民進党の政権継続に安心したはずだし、中国も民進党の退潮に内心喜んでいることは選挙後のコメントからもうかがえる。だからこそ敗者なき選挙であり、「台湾海峡情勢」は次の 2028 年までの「猶予」を４年間稼いだ形となり、これから三党による生き残りをかけた延長線がすでに始まっている。誰もが内容に一定の不満は抱きながら、未来に希望を抱けるこの絶妙な結果を、有権者の知恵だと解釈するのはいささか台湾への贔屓が過ぎるだろうか。

今回の選挙について、事前に私が予想した選挙結果は実際の結果とほとんどズレのないものだったが、唯一予想を外したのが投票率だった。事前の人々の反応や関心ぶりからして、70%を下回り、66～68%ぐらいになると考えていた。ところが、結果をみれば投票率は 71.68%となった。台湾は在外投票も期日前投票もできず、戸籍所在地での投票のみ許されるという、投票者にとってはなかなかハードルの高い投票制度を持っている。それでも投票率が７割を超えてくるのは実質８割以上の意味があると考えることもできる。台湾は国際社会において国家承認という面で正統性が不足している。その弱点を補う「健全な民主主義」という国際広報上の生命線を守ることに全住民が党派を超えて一体となって懸命に取り組んでいることが感じ取られ、台湾の民主の足腰の強さに改めて感服した次第だ。

オンライン版 New!

総代理店：丸善雄松堂

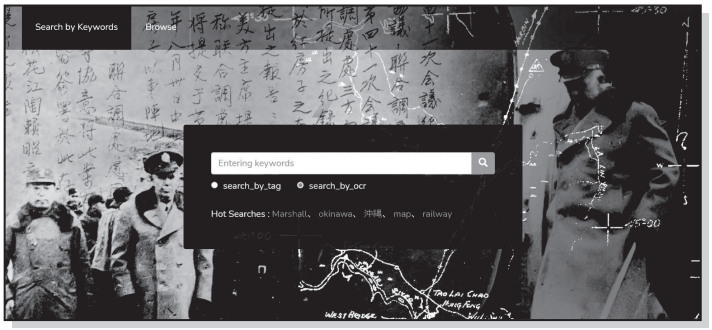
美方調停國共事件紀錄簿

NARA所蔵 国共内戦とアメリカ 1945-1947年の記録

漢珍數位圖書（Transmission Books & Microinfo）

1945年12月、トルーマン大統領はジョージ・マーシャルを中国に派遣。中国共産党と国民党の軍事衝突を回避すべく調停を試みたアメリカ側の資料は20万ページを超え、NARAに保管されてきました。本データベースは、研究者や専門家に待ち望まれていたデジタル化企画であり、現在の情勢にもつながる貴重な学術資料です。

資料の言語：英語 中国語
収録資料の種類：報告書、手紙、地図 など



購入型、年間購読型がございます。価格などの詳細はお問い合わせください。

MARUZEN-YUSHODO 丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部
〒105-0022 東京都港区海岸1-9-18 国際浜松町ビル TEL 03-6367-6114 FAX 03-6367-6160 e-mail: e-support@maruzen.co.jp

台湾の政治がポスト政治時代に入る中、キリスト教はどちらに向かっていくのか

藤野陽平（北海道大学）

2020 年 1 月選挙の時期に訪問したのを最後に新型コロナウイルスのため約３年間台湾を訪問できなかった私にとって、2024 年の選挙は正直事前の予想とは異なるものとなった。前回選挙の最大のイシューは香港の問題であったが、今回は香港の問題は顧みられることもほぼなくなっていた。その他にも国際社会からも注目されていた性的マイノリティの問題や脱原発といったイシューも影を潜め大きな争点にはならなかった。台湾は変化が大きいところであることを承知していたつもりであったが、たった３年のブランクで浦島太郎状態に陥ってしまうとは思っていなかった。

３人の候補者の政策の違いよりも、郭台銘が立候補に必要な署名を集められるかということや、藍白合が成功するのかというようなことが話題になることが多く、最大の争点である中国との距離感も、民進党は民主主義や人権の重要性を主張し、国民党、民衆党は中国との関係改善と差はあるものの、いずれも現状維持という立場であり、いずれの主張も従来に比べて穏やかだった。私の知り合いには民進党支持者が多いのだが、前回の選挙までは熱心に民進党を応援していた人たちでも、今回はその熱が冷め、他の選択肢がないから仕方なく民進党に投票するという人が多かった。

私の主たる調査対象であるキリスト教でも、この傾向は顕著にみられた。従来の台湾のプロテスタント教会は台湾語を用いる台湾語教会と、中国語を用いる国語教会とに分かれていて、大まかにいって前者がホーロー系、独立志向、民進党支持の信者が多く、後者は外省人、統一志向、国民党支持の信者が多いという棲み分けがされていた。政治の世界と軌を一にして、プロテスタントにおける従来型の棲み分けも綻びが見えるようになっている。こうした動きは以前から若年層ですでにみられていたものであるが、今回の選挙ではより顕著になった。

台湾語を重視してきた長老教会において若者層を中心に台湾語が理解できない人が増加する中で、華語礼拝を併用するケースが広がっているし、国語教会も中国語以外の利用も広がり、両者の言語による垣根は低くなってきている。国語教会、台湾語教会の両方に参加する人も増えているようで、両者の間の拒絶感は和らいでいる。例えば私が調査で通っている長老教会の国際日語教会に若者が「KMT」と書かれたジャケットを着てきたことがある。10 年前ならば考えられない状況である。

教団としての方針について、台湾語教会である長老教会は「2024 年台灣總統及立法委員選舉支持準則」というものを出し、一方の国語教会である台北靈糧堂も「台北靈糧堂面對 2024 年總統及立委選舉之基本立場」を出している。紙幅の関係で内容は紹介しないが、両者の主張も接近している。

この半年間の台湾滞在で、こうした状況に接し、冷戦時代の右派左派が争った敵対性が失われ、対話で解決が目指されるポスト政治の時代に入ることで、逆に民主主義が崩壊するというシャンタル・ムフのポスト政治の議論（『政治的なものについて』（酒井隆史監訳、篠原雅武訳）2008 年明石書店 ）を考えさせられる。ややこしい理論的な話は置いても、いずれの候補者の主張も接近してしまった場合、例えば統一や独立といった対立する主張を持つ市民の意見を反映させる機会が失われてしまう。主要な論点についての選択肢が示されないことは、民主主義のあり方としてふさわしいものなのだろうか。

従来の藍と緑の敵対性が失われつつある今日の台湾社会において、キリスト教も民主主義を重要視してきた台湾語教会と、政教分離を訴え政治と距離をとってきた国語教会との間にポスト政治的状況が生まれつつあるのかもしれない。

もちろんムフは欧米社会を念頭に置いて議論をしているので、その議論を当てはめるわけにはいかないものの、参考になる部分も少なくない。台湾は今後もポスト政治化が進んでいくのだろうか、それとも敵対性を回復していくのだろうか、この先の台湾社会で何が起きるのか。私としてはキリスト教や宗教の世界にどう影響があるのかを今後は考えていきたい。

風響社

中国民族誌学 100年の軌跡と展望
河合洋尚他編 膨大な中国研究・人類学を主題別に整理・総覧。 三九六〇円

土楼 円い空の下で暮らす福建客家の民族誌
小林宏至著 宗族・客家が土楼を生み出したという言説を再考。 五五〇〇円

華南 広東・海南の文化的多様性とエスニシティー
瀬川昌久著 人類学の普遍的な課題への挑戦の場を多角的研究。 三八五〇円

天津の鬼市 路上古物市場をめぐる〈空間〉と〈場所〉の人類学
櫻井想著 「沈黙交易」に由来する古くて新しい生業の今を検証。 五五〇〇円

辺境からの中国 黄海島嶼漁民の民族誌
緒方宏海著 辺境だからこそ、中国社会の実態と未来が見える。 五五〇〇円

中国農村の生活世界
中生勝美著 「中国農村慣行調査」の現地。変化と不変の間から。 五五〇〇円

冷戦アジアと華僑華人
陳來幸編 聞き取りと史料を掘り起こし、人々の「根」を探る。 四四〇〇円

記憶と歴史の人類学 東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験
風間計博・丹羽典生編 史実と虚偽のあわいに立つ経験を探る。 三九六〇円

日本軍政下ジャワの華僑社会 『共栄報』にみる統制と動員
津田浩司著 華僑社会の実像を再構築。歴史の空白を埋める。 六六〇〇円

南太平洋の中国人社会 客家、本地人と新移民
河合洋尚著 ブックレット海域アジア・オセアニアの最新作。 九九〇円

中国殷代の青銅器と酒
内田純子著 ブックレット《アジアを学ぼう》の最新作。 七七〇円

114-0014 東京都北区田端 4-14-9
http://www.fukyo.co.jp（価格税込）

＊学会特価販売、QR コードからも。
出版のご相談、随時受け付け中です。

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会（関東）

担当幹事：松岡格（獨協大学）

【第 160 回日本台湾学会定例研究会活動内容】
日時：2023 年 10 月 22 日（日）（土）14:00～16:00
場所：東京大学駒場キャンパス 18 号館４階 コラボレーション I
講演者：陳玉女（国立成功大学副学長・歴史学系教授）
司　会：松葉隼（早稲田大学台湾研究所次席研究員）
報告題目：「大学共通科目の理念と学部横断的歴史教育の実践―「一生もの」を手に入れる国立成功大学全学必修科目『踏溯台南』の経験から」
主催：早稲田大学台湾研究所
共催：日本台湾学会（定例研究会）
　　JSPS 科研費 基盤研究(C) 21K12401 （研究代表者：田原史起）
　　JSPS 科研費 基盤研究(C) 20K02615 （研究代表者：山﨑直也）
参加人数：30 名

活動報告：
　本講演で陳玉女氏は、台湾の国立成功大学で開講されている必修教養科目「踏溯台南（台南を歩きながら考える）」の創設から現在に到る経緯、内容や成果などについて紹介した。
　この体験型授業の目的は、成功大学の所在地、台湾の歴史・文化の古都台南-の史跡などを訪ね、学生たちに自らの暮らす地域、故郷や社会と大学、自身の関係について関心や探究心を持たせることにある。現在、授業は中国語もしくは英語で行われ、人文・社会科学と自然科学の知を連携させた様々なコース（路線）が用意されている。2017 年から 2023 年までの累計履修者数は 17,393 人であり、学生の満足度は年々高まりつつある。また、地方自治体と連携・協働し、一般市民が参加できる活動の設置も計画されている。さらに、別の方面での成果は、2019 年に「踏溯」の商標を登録し、2022 年には関連するイベントを企画する株式会社をも設立、人文系の講義を出発点としたビジネスの構築例となった点が挙げられる。講演終了後、フロアから授業開設・実践上の課題についてなど多くの質問が寄せられた。（記録者：魏逸瑩）

【第 161 回日本台湾学会定例研究会活動内容】
日時：2023 年 11 月 18 日（土）14:00～16:00
場所：早稲田大学早稲田キャンパス３号館 606
報告者：鈴木恵可（中央研究院博士級研究員）
コメンテーター：立花義彰（元静岡県立美術館主任学芸員）
報告題目：新書書評会『黃土水與他的時代：臺灣雕塑的青春，臺灣美術的黎明（黄土水とその時代：台湾彫刻の青春、台湾美術の黎明）』（遠足文化、2023 年）
主催：早稲田大学台湾研究所

共催：日本台湾学会（定例研究会）
参加人数：10 名

活動報告：
　著書の内容を紹介する前に、著者の鈴木恵可氏は、まず台湾近代美術／彫刻史の研究課題について①政治的理由による学術的研究の歴史の短さと層の薄さ、②基礎的資料や作品の整備保存の不備、③絵画研究と比較した場合の彫刻研究の少なさ、の３点を指摘した。
　本書が主に論じた黄土水は台湾最初の近代彫刻家として高く評価されたが、研究上では現存作品や一次資料の少なさという困難があり、加えて黄土水の作品における「台湾主題」に対して評価が分かれているという。したがって、本書の目標は、作品制作の内容および意図を時代背景のなかで正確に分析することである。
　本書の内容は２部に分かれており、第１部は黄土水の創作活動を考察して作品を分析し、第２部は、日台両方の「黄土水」以前／以後の彫刻家を対象として彼らのネットワークや作品などを検討する。結論として、当時の台湾では彫刻家となる環境が整備されておらず、東京に出て官展で出展するか美術学校で学ぶかのいずれかを行なった後で故郷に戻るという形で、「中央」と「故郷」の二重の活動の場を形成することが必要であった。ただし、注意しなければならないのは、東京を「中央」とするこういった帝国内の不均衡な関係性も現れていることである。また、黄土水以降の第二世代の特徴は、多様化と新しい思想の潮流を受けた人材の輩出である。こういった植民地期の研究を行うにあたり、もちろん植民地支配の暴力性を批判することは必要であるが、実際にはそのような体制の下であっても美術家たち個々人には主体性があるはずであった。そのため、こういった不均衡な体制下でも、台湾人の彫刻家たちが彫刻を通して自らの手で自らの風景を創り出す自由の余地があった。
　コメンテーターの立花義彰氏は、今までの日本近代美術史の中の台湾美術は官展中心主義的に語られていたことから、日本と台湾の関係（先生と弟子）は一方通行の関係と理解して適切なのか、そして官展中心主義は適切なのかとの疑問を提起した上で、この点に関して鈴木恵可氏の著書が新たな視点を提供したという点を評価した。（記録者：魏逸瑩）

【第 162 回日本台湾学会定例研究会活動内容】
日時：2023 年 12 月５日（火）　15:00～17:30
場所：東京大学駒場キャンパス COLLABORATION ROOM3
報告題目：再談 1958 年前後的東亜“冷戦”：第二次台灣海峡危機 65 週年學術研討會（1958 年前後の東アジア”冷戦”再論：第二次台湾海峡危機 65 周年学術シンポジウム）
報告者：江柏煒（国立師範大学教授）、川島真（東京大学教授）
コメンテーター：五十嵐隆幸（防衛省防衛研究所研究員）、福田円（法政大学教授）
主催：科研費基盤研究（B）「19-21 世紀中国の国際秩序観の歴史的変遷と外からの視線」
共催：東アジア国際関係史研究会、日本台湾学会（定例研究会）
参加者：28 名

活動報告：
　第二次台湾海峡危機 65 周年にあたり、台湾海峡危機が東アジアの冷戦史の文脈でいかなる意味を持ったのかということを改めて論じるべく、このシンポジウムが開かれた。その際に、ま

さに危機の最前線にあった金門島の視点を取り入れること、また東アジア地域の観点を踏まえるために日本の台湾海峡への視線を取り入れようとした。会議は中国語で行われた。

江柏煒（国立師範大学教授）は、「国際地縁政治下的地方社会：1958 年第二次台海危機下的金門與馬祖」と題した報告を行い、アメリカの公文書に基づいた米華相互防衛条約の下での金門島の位置付けから、僑郷としての金門島の冷戦の下での華僑送金や人の移動など数多くの論点が提起された。特に、金門島における軍事面での状況は、中華民国が「反攻大陸」を（言葉ではなく軍事的な意味で）実行しようとしていたかという大きな問題にも強く関わるものであった。

他方、川島真会員（東京大学教授）の 報告「第二次台海海峡危機與日本 60 年美日安保條約：対金門島的関係與被捲」は、1958 年から 1960 年の時期こそ冷戦下の日本社会が金門島、台湾海峡に最も注目した時期だとし、戦後の反戦基調、60 年安保をめぐる交渉での「巻き込まれ」への懸念などで金門への注目が集まり、また中国承認問題がそこに絡み、金門・馬祖はそもそも中華民国の領土なのか、などといった議論が活発に交わされた。1962 年の日活映画「戦争にかける橋」もそうした背景の下に生まれたのだという。

これに対して、討論者の福田円会員（法政大学）および五十嵐隆幸会員（防衛省防衛研究所研究員）から問題提起、質問がなされ、第一次台湾海峡危機との比較や当時の金門島内の状況などについて議論が深められた。

またフロアからの討論では、台湾社会でのアメリカ認識、日本の左派の言論、第三次台湾海峡危機との比較、現在との比較などの質問が出され、活発な議論が交わされた。最後に江教授からは、目下、台湾での台湾海峡危機は極めて敏感なテーマであり、こうしたシンポジウムが開きにくい状況にあるとの発言があった。こうした意味でもこの会合の持つ意味があったのなら幸いである。（記録者：川島真）

【第 163 回日本台湾学会定例研究会活動内容】

日時：2024 年 1 月 26 日（金）17:30～20:30
場所：早稲田大学早稲田キャンパス 3 号館 602
司会：若林正丈（早稲田大学台湾研究所学術顧問）
報告者：小笠原欣幸（東京外国語大学名誉教授）、松田康博（東京大学東洋文化研究所教授）
報告題目：小笠原欣幸「総統選挙と立法委員選挙の分析」、松田康博「台湾総統選挙と米中台関係」
主催：早稲田大学台湾研究所
共催：日本台湾学会（定例研究会）
参加人数：250 名

活動報告：

第一報告において、小笠原欣幸は、今回の総統選において、絶対得票率の点から見ると、台湾の政党政治の構造は確実な変化を示しているが、三党政治が確立するか否かはいまだ不透明であると指摘した。また、今回の総統選と立法委員選では三党ともに「勝ち」と「負け」があったが、総統選の長期トレンドから見れば、民進党の圧倒的優位が終わったと考えられる。立法委員選では、民進党が確かに議席を減らしたが、選挙区の政党得票率では若干国民党を上回っていた。選挙結果を検討すると、中国との統一を拒否するという民意の構造は変わらず、台湾人アイデンティティも変動しなかった。一方で柯文哲の登場により選択肢が増加したと論じた。そして、選挙区から地方の動向を見ると、激戦区で民進党が苦戦していたことが明らかに

なった。とりわけ、国民党が若手を擁立した選挙区では民進党が議席を失う傾向があった。民進党が苦戦した理由として、台湾アイデンティティが争点にならず、不祥事・スキャンダルが続けざまに明らかになり、民衆党の戦略もあって民進党に「古い」イメージがついたことが挙げられる。他にも、今回、柯文哲の独壇場になったTikTokが若者のアイデンティティに対してどのような影響をもたらすのかについては今後注目する必要があると指摘した。総括すれば、今回の選挙において台湾の有権者の「オレ様、お上、あっさり」の特徴が相変わらず現れ、台湾の選挙ダイナミズムが健在であると結論づけた。

第二報告において、松田康博は、2019年から2020年までの香港の「一国二制度」破壊が決定的に台湾の民意において地殻変動をもたらしたと分析した。この点に関して、台湾独立に対する支持率の浮上、台湾人アイデンティティの高まり、そして前回の総統選における蔡英文総統の得票率の増加が明らかに示されている。今回の総統選では、１：台湾本土派が分裂しても民進党が勝利、２：民衆党は若者の不満のはけ口であり今後成長の余地あり、３：国民党の長期的な衰退傾向の3点が見られたことを指摘した。また、中国による選挙介入があったが、選挙にほぼ影響を与えなかった。今後、中国は台湾に圧力をかけつつ、賴清徳政権とコミュニケーションチャネルを構築し、野党勢力を発達させ、2028年の政権交代を狙うとともに、同時に軍事力強化を図ることが推測されると指摘した。アメリカは台湾支援を継続しつつも、大統領選でトランプが再選された場合、その台湾政策は不確実性が高まると予想されることを論じた。

参加者が多数に上り、フロアからは様々な質問が飛び交い、活発な議論が行われ、実りのある研究会となった。（記録者：魏逸瑩）

【第164回 日本台湾学会定例研究会活動内容】

日時：2024年1月27日（土）15::00～17:00
場所：東京大学駒場キャンパス18号館コラボレーションルーム1
報告者：林孝庭（スタンフォード大学フーバー研究所研究員）
司会：川島真（東京大学教授）
報告題目：「兩蔣文物返還台灣」
主催：科研費基盤研究（B）「19-21世紀中国の国際秩序観の歴史的変遷と外からの視線」
共催：東アジア国際関係史研究会、日本台湾学会（定例研究会）
参加人数：25名

活動報告：

本研究会では、報告者からの報告の後、司会からのいくつかの問題提起がなされた上で、参加者との間の質疑応答がなされた。この報告の主題は以下の諸点にあった。

（１）蔣介石日記・蔣経国日記をはじめとする「文物」がどのような経緯でスタンフォードに委託されたのか（寄贈ではない）、またどのような経緯で台北の国史館に「返還」されることになったのか、ということである。そもそも、これらの総統関連の史料は台湾の法律では「文物」に分類され、国家檔案管理局ではなく、国史館の管轄だとされている。

（２）次にそもそも返還されたものが何であったのかということである。実のところ返還されたのは二人の総統経験者の日記だけではない。これまでスタンフォード大学には日記以外の史料も寄託されていたが、それらは公開されてこなかった。そしてこの非公開の史料も、今回「文物」として国史館に移管されることになった。

この報告では、その非公開であった史料にはどのようなものがあったのかということが紹介された。それらには国共内戦、冷戦下の両岸関係などに関する未知の史料が多く含まれていた。

フロアとの議論では、日記の公刊計画、日記史料の意義などもあったが、主たる議論はこれらの日記が 1948 年分から公刊されることによって、戦後台湾史研究にどのような影響を与えるのかということであった。従来、戦後中華民国史と戦後台湾史との間の対話や相互関係は十分とは言えない状況にあったが、日記の公刊を契機とした変化が見られるかもしれない。（記録者：川島真）

【日本台湾学会定例研究会第 165 回活動内容】

日時：2024 年３月４日（月）14:00～17:00
場所：東海大学品川キャンパス１号館 1201
司会：小笠原欣幸
報告：呉介民（中央研究院）
題目：「2024 總統選舉中的中國因素–對近年來疑美恐中論的初步考察」
報告：張貴閔（台湾大学）
題目：「跨海峡民間宗教統戦的虚與實–對 2024 年台灣選舉的考察」
コメンテーター：川上桃子（ジェトロ・アジア経済研究所）
コメンテーター：平井新（東海大学）
共催：早稲田大学台湾研究所、日本台湾学会（定例研究会）
後援：日本台湾交流協会
参加人数：40 名

活動報告：

本研究会は「台湾総統選挙と米中要因」をテーマとし、台湾から呉介民先生（中央研究院）、張貴閔先生（台湾大学）のお２人をお招きして開催された。本研究会はすべて中国語で行なわれた。

呉介民氏からは台湾社会における「疑米論」と「中国恐怖感」について中央研究院の世論調査を使った実証的報告があった。呉氏は，中国要因の否定論と肯定論を紹介し、短期的効果と長期的効果の両方を見る必要を論じた。また，統一独立の世論調査については、「どちらに賛成するか」だけでなく、「将来どうなっているか」を聞くことによって台湾世論をさらに深く掘り下げて分析することができるという方法論の紹介もあった。

張貴閔氏からは中台の宗教交流への中国の関与について報告があった。張貴閔氏は中国における宗教活動、宗教交流が統一戦線部・国家宗教事務局・愛国宗教団体によって管理されている構造を示し、そのうえで具体的な交流活動の事例を分析した。そして 2024 年総統選挙の選挙期間における宗教交流について、両岸の訪問、交流イベントの具体的な事例、媽祖をめぐる言説の事例を示しながら、宗教を通じた中国の統一戦線工作の複雑さを論じた。

両氏の報告に対し、川上桃子会員・平井新会員がコメンテーターとして問題提起を行なった。また、会場から多くの質問が出て活発な議論が展開された。

報告、コメント、質疑応答がかみ合って非常に有意義な研究会になった。なお、呉介民氏の報告の途中で会場の PC がダウンし、報告者や会場の出席者にご迷惑をおかけしたことをおわびしたい。（記録者：小笠原欣幸）

定例研究会

関西部会研究大会

担当幹事：五十嵐真子（日本台湾学会）

2023 年 12 月 23 日（土）13 時 30 分より、大阪・梅田にある関西大学梅田キャンパス KANDAI Me Rise にて第 21 回関西部会研究大会を開催した。今年も昨年同様に対面と Google Meet を併用して実施した。会場での参加者は 30 名、オンラインでの参加者は 15 名だった。

今年は以下の４つの研究報告が行われた。（※リモート参加）

第１・２報告が歴史分野、第３報告が文学分野、第４報告が政治分野である。

第１報告　「終戦前後における大阪府の台湾出身者について」
　　報告者：謝政徳（大阪大学招へい研究員）　評論：鶴園裕基（香川大学）
第２報告　「戦後・冷戦期における愛知県の華僑と「二つの中国」、そして台湾」
　　報告者：岡野翔太（大阪大学特任研究員）　評論：和泉司（豊橋技術科学大学）※
第３報告　「越境者としての胡蘭成―中国、日本、台湾における文学交流とそれによるイメージの形成に着目して―」
　　報告者：呉穎濤（大阪大学大学院）　評論：濱田麻矢（神戸大学）※
第４報告　「現代台湾史における蔡英文政権の位置：歴代の総統文告から見る」
　　報告者：若松大祐（常葉大学）　評論：松田康博（東京大学東洋文化研究所）※

第１報告は『大阪府統計書』『知事事務引継書』といった大阪府の公的資料をもとに、終戦前後の在大阪台湾出身者の実態解明を試みるものである。1940 年頃より労働を目的とした渡来が急増し、終戦の頃には 4329 人となった。「特高課関係事務引継書類」によると概ね教育程度が高いが、増加とともに「漸次民族的反感」が高まり、朝鮮半島出身者とのトラブルが生じ始めていた。終戦直後にはその約９割が台湾への送還を希望し減少傾向にあったが、台湾の状況変化により 1947 年６月には再び増加に転じた。また戦後の混乱期には生活に困窮し日本政府より生活保護を受ける者もあったが、闇市などで経済的に成功する者もあった。報告者は民間史料を発掘することによりさらなる検証を課題とした。

評論者の鶴園氏は謝報告が従来の研究では用いられてこなかった史料から、戦後直後の大阪府による生活擁護の実態などの新事実の発見等について評価した上で、在大阪社会の特徴をより掘り下げることや日本政府以外の行政（GHQ や駐日代表団など）とのかかわり、それらに対する対応などの課題を提示した。フロアからは行政による生活支援の法的根拠についての質問や華僑団体が戦前・戦後で名称が異なることなど史料への批判が不足しているといった指摘があった。

第２報告は第２次大戦後から日中国交正常化までを対象とし、史料に基づきながら名古屋に 2 つの華僑組織が併存するに至る過程について紹介するものである。報告では中華民国政府とチャンネルを維持する中華民国留日名古屋華僑総会と親中華人民共和国の愛知華僑総会の双方について、名称の変遷や関係する重要人物を詳細に取り上げた。また、「二つの中国」をめぐる状況が不明な中で揺れ動いた人物についても注目している。

評論者の和泉氏は愛知・名古屋は主要地域であるにも関わらずこれまで中華圏との関係史が注目されることが少なかった地域で、これまで東京中心であった研究に対して意義をもつものであると指摘した。質問として台湾独立支持派はこの地域ではどのような勢力を持っていたのか、また東京の勢力との関係はどうであったのか、という点を挙げた。フロアからは名古屋に隣接する他の東海地方との関係といった視点も加えてはどうかといった指摘もあった。

第３報告は作家・胡蘭成を異文化理解の観点からその足跡と異なるイメージの生成過程を明らかにし、同時に複数の地域に影響を与えた独特な文学の移動のあり方を明らかにするものである。報告では胡蘭成の移動と交流を詳細に追いながら、そのイメージの生成と多角性の分析を試みた。

評論者の濱田氏は呉報告全体を概観し、この報告が胡蘭成の魅力を探りつつ日中台の作家が描いた胡蘭成像を突き合わせる試みと解釈できるとした。さらに胡蘭成は実にとらえどころが難しい人物でどこまでが本当のところなのかがわからないという問題があり、むしろ書かれたものを突き詰めたほうが面白いのではないかという指摘がなされた。

第４報告は文告を読み解きながら蔡英文政権の特徴を把握する試みである。この報告では2016年からの政権期間を三つに区分しつつ、それぞれの時期のキーワードを提示し、最後に歴代総統の歴史観と比較しながらその特徴である台湾規模の共同体の論理と現状維持を肯定する姿勢について述べた。

評論者の松田氏からは文告のみに注目するこの報告では蔡英文政権を分析するには不十分である点、注目している「冷戦の論理」と「内戦の論理」という用語は現実とは意味が違っている点、そして蔡英文の「現状維持の肯定」は馬英九からは大きく中身が入れ替わっている点が指摘された。フロアからは蔡政権が行ってきた移行期正義について文告では言及が少ないことやかつてに比べて文告そのものへの注目が減ってきているのではないか、という指摘もあった。

評論者のうち３名がリモート参加となったが、フロアを交えて活発な質疑応答があった。オンラインでは台湾からの参加者もあり、今後も会場・オンラインの併用は継続していきたいと思う。

研究報告終了後、昨年同様に梅田の「大東洋」にて懇親会を行った。14名が参加し、こちらも盛況であった。

以上

WEB 東方

東方書店の WEB マガジン
https://www.toho-shoten.co.jp/web_toho
中国関係の書評やコラム、連載など読み応えたっぷり！
輸入書・国内書の図書情報や催事情報も充実しています。

待望の改訂版ついに刊行！（2024年7月上旬刊行予定）

東方 台湾語辞典

第2版

村上嘉英編著／四六判 576 頁／税込 8,800 円 978-4-497-22411-8

台湾教育部による台湾語常用語辞典オンライン版、国立成功大学台湾語検定試験センター認証の難易度明示台湾語単語集（試用本）ほか近年出版された台湾語（閩南語）の辞典、教科書、学習書などを参照の上、2007 年初版の語彙を増補・削減。

東方書店 ホームページ〈中国･本の情報館〉https://www.toho-shoten.co.jp/ ＊価格10％税込
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-3 ／営業電話 03-3937-0300 ／ FAX.03-3937-0955

airiti Library 【台湾 E-journal コレクション】

台湾と中国の学術リソースをプラットフォーム統合した Airiti “アリティ” から台湾発行（一部マレーシア等アジア・世界各地含む）2,888 タイトルを精選した E-ジャーナル・コレクションです。SCIE、SSCI、A&HCI、EI、MEDLINE などの国際的に重要な検索データベースに含まれる、優れたジャーナルを主に収集しました。 https://www.airitilibrary.com/

JUSTICE コンソーシアムに提案採択。ほとんどの大学様はコンソーシアム向け大幅割引価格が適用されます。
2024 年提案：円価格が設定されました。為替動向に関わらず一定の料金となります。詳細はお問い合わせください。

【収録分野・タイトル数】
人文学、社会科学、基礎応用科学、工学、生物農学、医薬衛生学の 6 分野 2,888 タイトル（‘24 年 4 月時点）

【言語別タイトル数：タイトルに複数言語を含むもの有】
繁体字中国語：2,112 誌 ／ 英語：1,377 誌 ／
簡体字中国語：51 誌 ／ 日本語：29 誌 ／ ほか

【主な導入機関】
台湾：600 機関以上（大学では市場占有率 100%。大学以外にも高校、病院、政府機関を含む）
中国大陸：300 機関以上（北京大学、清華大学、中国人民大学 等）／ トライアル実施 2,500 機関
アメリカ：40 機関以上（ハーバード大学、スタンフォード大学、アメリカ議会図書館 等）
日本：‘20 年実施の COVID-19 対応支援：無償アクセスでは 40 もの機関様にご利用いただきました

iRead eBooks 【台湾 E-book コレクション】

Airiti “アリティ”が誇る台湾・中国大陸・香港・マカオ・シンガポール・マレーシア・シンガポールなどの 60,000 タイトル以上の eBook コレクションも利用可能です。一冊ずつの買い切り購入のほか割安となる全分野・カテゴリーごとの購読購入もお選びいただけます。ご機関様向けに公費お支払にも対応しています。 https://www.airitibooks.com/

文生書院
日本販売総代理店 〒113-0033 東京都文京区本郷 6-14-7
電話(03)3811-1683 Fax:(03)3811-0296 E-mail: info@bunsei.co.jp

学会運営関連報告

川上桃子（アジア経済研究所）

【第13期常任理事会第１回会議議事録（抄）】

日時 ： 2023 年７月28日（金）13:30～16:30
場所 ： 関西大学東京センター＋オンライン（Zoom）
出席 ： 〔会場〕赤松美和子、明田川聡士、五十嵐隆幸、北波道子、洪郁如、冨田哲、松金公正、宮岡真央子、山﨑直也
〔オンライン〕清水麗、やまだあつし（第25回大会実行委員長）
欠席 ： 上水流久彦、菅野敦志、松田康博
主宰 ： 北波道子（理事長）
書記 ： 清水美里（幹事）

【報告】
１．理事長・事務局
（１）北波理事長
・第25回学術大会が無事終わったことへの謝辞と今後2年間の抱負が述べられた。
（２）川上事務局担当理事〔代理：五十嵐理事〕
・以下の通り会員情報について報告がなされた。
総会員数436名（2023年７月24日現在）
〔内訳〕一般会員372名、学生会員49名、シニア会員15名

２．各業務担当
（１）五十嵐総務担当理事
・新規入退会（2023年５月27日～７月27日）はいなかった旨報告された。
（２）山﨑会計財務担当理事
・配布資料にもとづき、会計財務関連の報告がなされた。
（３）宮岡広報担当理事
・配布資料にもとづき、広報関連の報告がなされた。
（４）松金前編集委員長
・配布資料にもとづき、『日本台湾学会報』第25号の編集状況が報告された。
（５）冨田企画委員長
・配布資料にもとづき、前回大会の分科会について報告された。
（６）菅野・洪国際交流担当理事〔洪国際交流担当理事〕
・配布資料にもとづき、国際交流担当事業について報告がなされた。
（７）定例研究会〔統括：明田川理事〕
・配布資料にもとづき、定例研究会について報告がなされた。

３．その他
特になし。

【議題】
１．第25回学術大会について（やまだ第25回学術大会実行委員長）
・配布資料にもとづき、第25回学術大会に関する報告がなされた。
・資料内容のほかに学会保有の立て看板について問題提起がなされた。
・立て看板の取り扱いについては継続審議となった。

２．第25回学術大会決算報告（やまだ第25回学術大会実行委員長）
・配布資料にもとづき、第25回学術大会決算に関する報告がなされた。
・助成団体との手続きが終了後、メール審議で決算を承認する。

３．第26回学術大会について（清水麗第26回学術大会実行委員長）
・配布資料にもとづき、第26回学術大会の通開催方式・大会シンポジウムについて報告がなされた。開催方式は基本的に従来通りで検討していくことになった。さらに、懇親会は開催の方向で検討することになった。
・大会参加費をとるべきか採決を行った結果、８名が大会参加費徴収に賛意を示した。
・大会報告の原稿は実行委員が執筆者からとりまとめをし、Web担当に送り、HPへのアップロードは Web担当が行うことが確認された。
・開催方式は Webexを使用したハイブリットで行い、懇親会は開催、参加費は徴収する方針となったことに伴い、実行委員は増員を検討することになった。

４．第26回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集要領について（冨田企画委員長）
・配布資料にもとづき、第26回学術大会、分科会企画・自由論題報告の募集要領が示された。登壇者は原則会場参加していただく。ただし、企画や自由論題のコメンテータについては、どうしても他に適任者がいない場合はオンラインを認めるという原案が示された。
・原案に加え、非会員の登壇者の大会参加費は求めない、懇親会費は徴収する旨が承認された。

５．『日本台湾学会報』第26号の投稿および原稿執筆要領等について（赤松編集委員長・松金前編集委員長）
・配布資料にもとづき、第26号の投稿および原稿執筆要領が示された。審議を経て原案通り承認された。

６．『日本台湾学会報』即リプライについて（赤松編集委員長）
・配布資料にもとづき『日本台湾学会報』「書評リプライ制度」の文言の修正案が示された。
・リプライ制度そのものが始まったばかりであるので定着して様子をみることが大事であるとし、次号における即リプライ制度は見送りとなり、リプライ制度の文言については、再修正案を提出の上、メールによる継続審議となった。

７．事務局保管中の『日本台湾学会報』在庫保存について（五十嵐総務担当理事）
・配布資料にもとづき、学会法バックナンバーの在庫保存に関する提案が示された。
・J-Stage担当理事および編集委員長が各１セットを保管し、そのほかは台湾の研究機関に寄贈、次回大会で無料配布という案が承認された。

８．会員入退会に関する審査要領ついて（五十嵐総務担当理事）

・配布資料にもとづき、会員入退会に関する審査要領が示された。
・入会については、常任理事によるメール審議を基本とし、異議がある場合のみ常任理事会会議で審議を諮る。退会については、現行の通り（会議での議決）とする案が原案通り承認された。

９．会員の入退会について（五十嵐総務担当理事）
・入会申請３件、退会申請１件が承認された。

10．次回常任理事会の日程について（五十嵐総務担当理事）
・2023年12月の金曜日ないし土曜日に実施する。

11．その他
特になし。

【第13期常任理事会第２回会議議事録（抄）】

日時 ： 2023年12月９日（土）13:30～17:00
場所 ： 関西大学東京センター＋オンライン（Zoom）
出席 ：〔会場〕明田川聡士、五十嵐隆幸、上水流久彦、北波道子、松金公正、山﨑直也
〔オンライン〕赤松美和子、洪郁如、清水麗、冨田哲、松田康博、宮岡真央子
欠席 ： 菅野敦志
主宰 ： 北波道子（理事長）
書記 ： 松葉隼（幹事）

【報告】
１．理事長・事務局
（１）北波理事長
特になし。
（２）川上事務局担当理事〔代理：五十嵐理事〕
以下の通り会員情報について報告がなされた。
・ 総会員数439名（2023年12月３日現在）
〔内訳〕一般会員374名、学生会員50名、シニア会員15名

２．各業務担当
（１）五十嵐総務担当理事
前回の常任理事会会議（７月28日）後、メール審議で入会１件が承認された。
（２）山﨑会計財務担当理事
配布資料にもとづき、会計財務関連の報告がなされた。
（３）宮岡広報担当理事
配布資料にもとづき、広報関連の報告がなされた。
（４）赤松編集委員長
配布資料にもとづき、『日本台湾学会報』第26号の編集状況が報告された。
（５）冨田企画委員長

配布資料にもとづき、第26回学術大会の分科会に関する準備状況が報告された。
（６）菅野・洪国際交流担当理事
配布資料にもとづき、国際交流担当事業について報告がなされた。
（７）定例研究会〔統括：明田川理事〕
配布資料にもとづき、定例研究会について報告がなされた。

３．その他
特になし。

【議題】
１．第26回学術大会分科会企画（冨田企画委員長）
・ 分科会企画４本（うち２セッション企画１本）、自由論題10本の応募があった。
・ プログラムについては、開催校と調整のうえ、３月の常任理事会で審議する。

２．第26回学術大会会場校の準備状況および予算案（清水実行委員長）
・ 配布資料にもとづき、学術大会の準備状況および予算に関する報告がなされた。

３．学術大会用「立て看板」の取り扱い（五十嵐理事）
・ 配布資料にもとづき、学術大会で申し継がれてきた「立て看板」の取り扱いについて審議が求められた。今後、「立て看板」の申し継ぎについては行わない。

４．『日本台湾学会報』査読規定の改正（松金副理事長、赤松編集委員長）
・ 配布資料にもとづき、査読規定の改正について審議が求められた。所要の修正を加え、『日本台湾学会報』査読規定を改正する。

５．学会報の海外発送における通関電子データ送信義務化への対応（赤松編集委員長）
・ 配布資料にもとづき、学会報の海外発送等について審議が求められた。次号の発送までに、通関電子データの住所登録を完了させる。

６．事務局保管中の『日本台湾学会報』バックナンバーの在庫保存（五十嵐理事）
・ 配布資料にもとづき、学会報の在庫管理について審議が求められた。余剰分については、台湾の図書館等に寄贈する方向で準備を進める。

７．『台湾文化事典』の編集協力（明田川理事）
・ 配布資料にもとづき、『台湾文化事典』への編集協力に関連して審議を進めた。

８．会員の入退会（五十嵐理事）
・ 入会申請３件 退会申請２件が承認された。

９．次回常任理事会の日程について（五十嵐理事）
・ 2024年３月に実施する。

10．その他

特になし。

以上

-　編 集 後 記　*-**-*-*-**-*-*-

・本号では、特集「はじめて台湾／日本へ行ったとき」として、台湾と日本を往還する珠玉のエッセイ９本をお届けします。1980 年代から 2010 年代に至るまで、幅広い自己省察のエピソードが集まりました。どれも研究者の動機や関心の源を映し出すようで、たいへん啓発に満ちています。これが読者の皆様にとって自身の情熱や趣向を振り返る一つの機会となれば幸いです。さらに 2024 年の総統選を経た今号では「総統選挙観察」の記事もお届けすることになりました。３人の専門家が様々な視点から濃厚な記録文を寄せてくださいました。いずれも今年の総統選をめぐる皆様の感慨を深め、知識や視野を広げてくれるものと信じています。執筆してくださった会員の皆様には、心より感謝申し上げます。

・次号 47 号（2024 年 10 月発行予定）は 2024 年 5 月 25 日（土）・26 日（日）に麗澤大学で行われる学術大会の様子を特集「第 26 回学術大会を振り返って」としてお届けする予定です。報告者、企画者の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

・ニュースレターは会員による情報交換の場でもあります。台湾と関わるシンポジウム・研究会・展示等の参加記や、学術交流の動向など、積極的なご投稿をお願い申し上げます。特集テーマの案、エッセイ執筆に関心のある方は、担当の八木までご連絡ください。

（八木はるな）

*-**-**-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-**-*-*-**-*-*-*

日本台湾学会ニュースレター　第 46 号

発　　行：日本台湾学会（代表　北波道子）
発行年月：2024 年 4 月

■日本台湾学会事務局
〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
アジア経済研究所気付
E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com
■ニュースレター発行事務局
〒112 -8551　東京都文京区春日 1-13-27
中央大学理工学部 八木研究室気付
E-mail: harunayg@gmail.com